

松波むかし語り

ここに生き続けて

その 20

今回のお客

生涯“先生”と呼ばれて

いわい はつ

岩井 はつさん 87歳 3丁目

“お前はいつ見ても手を動かしている”と
3年前に亡くなった主人が言ってました。”

昔からよく「手に職をつける」と言われ、手先の仕事を持てば食いはぐれないとされていますね。



先月号でご紹介した元町会長の高橋保さんのお隣りに住む岩井はつさんが今回の主人公です。毎年9月の敬老会で、会場の片隅で行われる手芸展示で「先生、先生」と呼ばれる方がいるのに気づいていました。手芸の先生かなと思っていたのが、今回の岩井さんで、編み物の先生でもあったのですが、この方、本物の小学校の先生でもありました……。

岩井さんは大正12年9月といえますから、関東大震災から24日目に誕生したことになります。生まれは九十九里海岸に近い海上郡矢指村（やさしむら 現在の旭市）で、実家は船大工をしていたそうです。千葉女子師範学校（現在の千葉大教育学部）を卒業して村の教師になりました。「数え19歳で12歳の6年生を教えていたんですから、歳もあまり変わりませんでした」。ちょうど、壺井栄の『二十四の瞳』の世界ですね。

実際に、岩井さんの教師生活は、『二十四の瞳』のように戦争に翻弄されます。昭和20年3月10日、東京の下町を襲った大空襲で、B29が、まるでおまけのように残った焼夷弾を落としていったのが、岩井さんの小学校に命中、木造校舎は丸焼けになってしまいました。「それからはお寺や、各集落ごとにあった公会堂で、1年生から6年生まで合同で授業をしました」。そして「男の先生は戦争にとられて不足していた時分で、5年ほどして、『結婚したので辞めさせてください』と言ったら、校長先生から『辞めないでほしい』と引き留められましたね」。そのため翌年の学年末まで、先生の職を続けたということです。



昭和32年頃 自宅での教室

亡くなったご主人は県庁に勤めていて、県の官舎住まいを経て昭和27年、松波の現在地に家を建てて移り住みました。

「当時は我が家の縁側に腰掛けると、向こうに総武線の電車が見えたくらい広々としてました」。そこで、結婚してから

習った編み物の腕を生かして、

「岩井あみもの教室」を開きます。当時の写真を見ると、生徒の若いお母さんたちは子連れで通っていて、保育所のようにとてもぎやかだったことがしのべれます。

「本に書いてある通りやらないと気が済まない性分で、何センチで編み目はいくつと、きちんと図に書いて教えてました」。説明した型紙が今もとつてあるとのこと、几帳面な性格がうかがえます。



小学校のPTAや社会福祉協議会など、地域の仕事にも率先してかかわってきた岩井さん、現在は、松波コミュニティ分室で月1回、手芸の好きな人たち10数人が集う「手芸の会」に参加しています。岩井さんにとって、手を動かすことは一生の仕事なのでしょう。